

発行 株式会社 新学社  
協力 公益財団法人 日本教材文化研究財団

アットシング

@  
Sing

Vol.12

新学社の教育情報誌

# 学習指導要領の 改訂ポイント

先行実施  
に向けて

総則と各教科の改訂ポイント、移行措置の概要  
カリキュラム・マネジメント実現に向けた実践例

連載

教材活用講座

～ワークブックと単元プリントで基礎学力の確認と定着を



## もくじ

**1** 学習指導要領の改訂ポイント～先行実施に向けて

p.2 総則の改訂ポイント

p.4 カリキュラム・マネジメント実現に向けた実践例①  
東京都板橋区立 赤塚第二中学校p.6 カリキュラム・マネジメント実現に向けた実践例②  
京都市立 東山泉小中学校p.8 各教科の改訂ポイントと移行措置の概要  
国語 p.8 / 社会 p.9 / 数学 p.10 / 理科 p.11 / 外国語・保健体育 p.12**2** **連載** 教材活用講座 第2回  
～ワークブックと単元プリントで基礎学力の確認と定着をp.14 ワークブックで学びの土台作り  
国語 p.14 / 社会 p.15 / 数学 p.16 / 理科 p.17 / 英語 p.18

p.19 単元プリントで形成的評価

# 新学習指導要領 総則の 改訂ポイント

平成33年に完全実施される次の学習指導要領。今回の改訂のキーワードとして、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」が挙げられる。今回は、学習指導要領解説の内容も踏まえ、改訂のポイントをキーワードごとに取り上げよう。

## 改訂のポイント

### 1. 育成を目指す資質・能力の明確化

① 生きて働く知識及び技能  
各教科等において習得する知識や技能。個別の事実に必要な知識だけでなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識を含む。未知の状況にも対応できる。

思考力、判断力、表現力等

「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力。各教科等の特質に応じて育まれるようにつくるとともに、教科等横断的な視点に立って育まれるようにつくることが重要。

### ② 学びを人生や社会に生かそうとする

「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素。

・ 学びに向かう力、自己の感情や行動を統制する能力などの、「メタ認知」に関するもの。  
・ 協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの「人間性等」。

### 2. 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

#### 「主体的・対話的で深い学び」とは

**【主体的な学び】**  
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。  
**【対話的な学び】**  
子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。  
**【深い学び】**  
習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

※1単位の授業の中で「主体的・対話的で深い学び」をすべて実現しなければならないわけではない。

#### 授業改善を進める上での鍵

- ・ 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、それぞれをどの場面や設定するかを考へるよう。
- ・ 各教科等の特質に応じた見方・考え方を軸とするよう。
- ・ 各教科で言語活動・読書活動を充実させるよう。
- ・ コミュニータ、視聴覚教材、学校図書館、地域の公共施設などを活用するよう。
- ・ 見通しを立てたり、振り返ったりする活動を実施するよう。
- ・ 家庭や地域社会と連携し、体験活動を実施するよう。

### 3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進

カリキュラム・マネジメントとは、「各学校において、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」などを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことである。

#### 「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

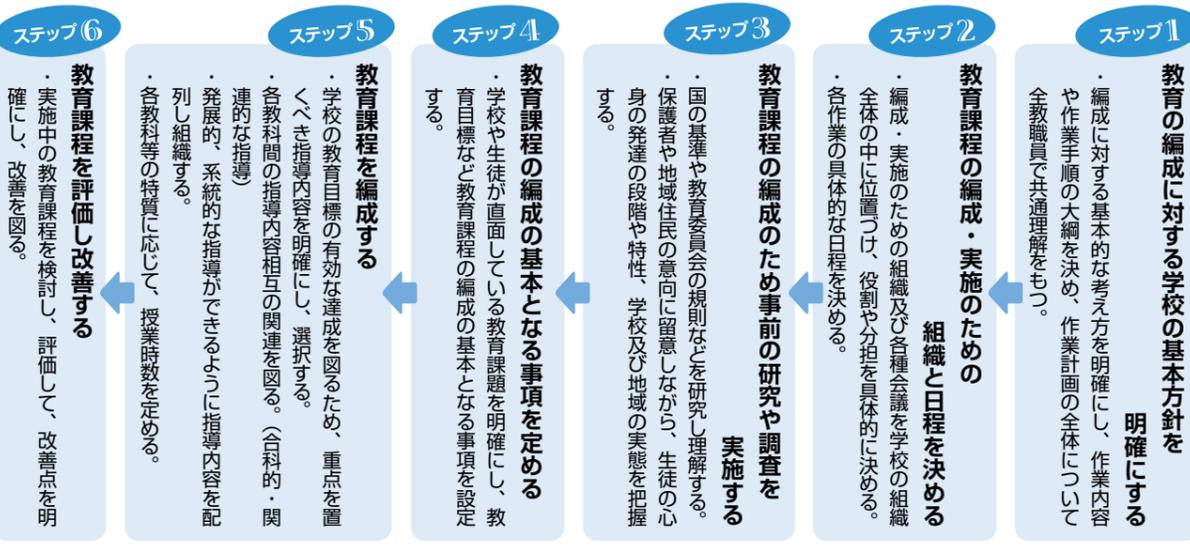
- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、**学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点**で、その目標の達成に必要な教育の内容を**組織的に配列**していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の**PDCAサイクルを確立**すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、**地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせ**ること。

すべての教職員がそれぞれの立場で実践していくべきもの

#### ●教科横断的な視点に立って育成する資質・能力

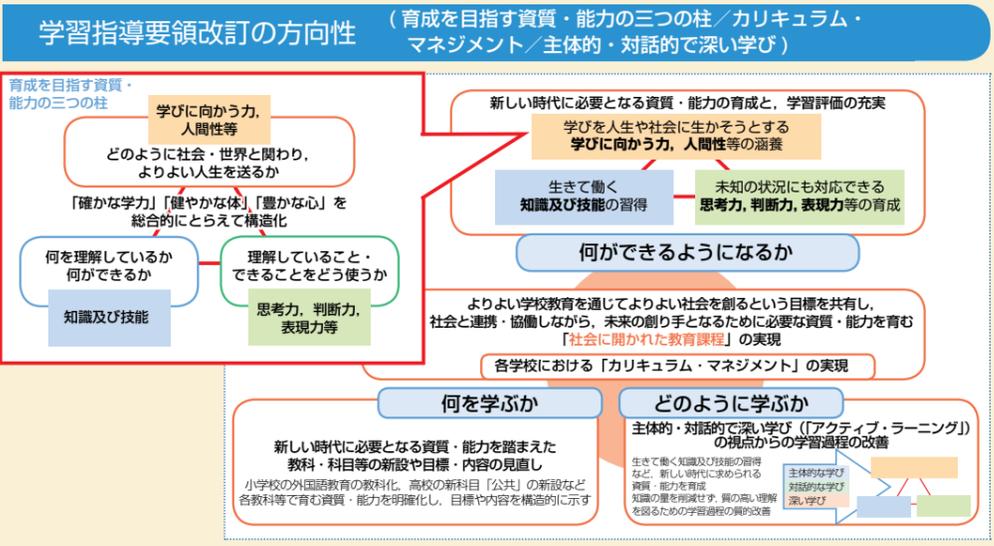
- ① 各教科等で育成を目指す資質・能力ではあるが、他の教科等における指導と関連付けられるもの。
- ② 言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力など、すべての学習の基盤となるもの。
- ③ 主権者教育、食育、防災など現代的な諸課題に対応して求められるもの。

### ●カリキュラム・マネジメントの手順の一例



### 4. 教育内容の主な改善事項

- ・ 言語能力の確実な育成  
(例) 学習の基盤としての各教科等における言語活動(実験レポートの作成など)の充実
- ・ 理数教育の充実  
(例) 日常生活等から問題を見出だす活動や見通しをもった観察・実験などの充実により学習の質を向上
- ・ 伝統や文化に関する教育の充実  
(例) 古典など我が国の言語文化、我が国や郷土の音楽・和楽器、武道などの指導の充実
- ・ 道徳教育の充実  
(例) 道徳的価値を自分事として理解し、多面的・多角的に深く考えたり、議論したりする道徳教育の充実
- ・ 体験活動の充実  
(例) 生命の有限性や自然の大切さ、挑戦や他者との協働の重要性を実感するための体験活動の充実
- ・ 外国語教育の充実  
(例) 小中高一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図る目標の設定/国語教育との連携
- ・ その他の重要事項  
5. 初等中等教育の一貫した学びの充実  
(例) 学校段階間の円滑な接続や教科横断的な学習の重視
- ・ 主権者教育、消費者教育、防災・安全教育などの充実
- ・ 情報活用能力(プログラミング教育を含む)
- (例) コンピュータ等を活用した学習活動の充実
- ・ 部活動  
(例) 教育課程との関連に留意/社会教育関係団体等との連携による持続可能な運営体制の構築
- ・ 子供たちの発達の支援(障害に応じた指導、日本語の能力等に応じた指導、不登校等)



# 東京都板橋区立赤塚第二中学校 「チーム学校」で「赤二型学力」の育成を目指す

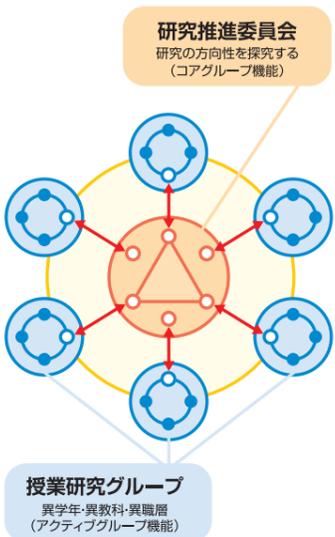


▲社会科の授業教室での協働学習

東京都板橋区立赤塚第二中学校（以下「赤二中」）は、「教科センター方式」の校舎、板橋区ICT実証実験校として整備されたICT環境などの特色をいかして、新しい学習指導要領にある「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」を視野に、授業改善に向けた実践が続けられている。新学習指導要領に向けた実践のヒントとして、赤二中の特色や研究組織・研究内容を紹介する。

## 1. 赤塚第二中学校の概要と研究のあゆみ

- 概要**
- 所在地：東京都板橋区成増3-1-8-1
- 学校長：宮澤一則先生
- 学級数：14 生徒数：513名（平成29年度）
- 平成23年～25年度 板橋区教育委員会  
指導力向上特別研究校
- 平成25年度 新校舎完成  
▼教科センター方式に
- 平成26年度～30年度 板橋区指導力向上推進校
- 平成26年度～30年度 板橋区ICT授業研究  
実証実験校
- 平成29年1月 学校情報化優良校に認定



**2. 赤二中の研究組織の特色**  
校内研究は、複数の「つながり」を重視した組織・体制により行われている。

まず第一に、校内の「同僚とつながる」ことを重視した協働研究組織が挙げられる。校長・副校長を含む「研究推進委員会」がさまざまな研究の方向性を探究し、「研究推進委員会」のメンバーを含んだ複数の「授業研究グループ」（以下「小グループ」）が、小グループごとに自分たちで課題を見つけて研究を進める。小グループは、異学年・異教科・異職層を組み合わせて編成さ

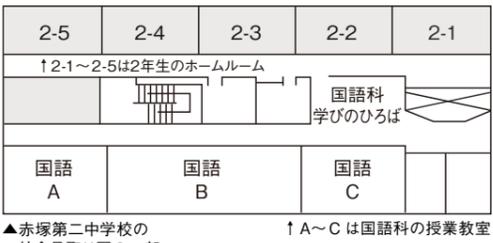
れる。教職員のみならず、養護教諭や栄養士なども小グループに参加し、月に一度の合同研究会には、事務職員も参加する。文字通り、学校に所属する全教職員が一体として「つながる」ことで、研究が進められている。第二に、福井大学教職大学院との「つながり」が挙げられる。福井大学教職大学院から指導を受けるだけでなく、一部の教員が毎週末に福井に通って修士課程で学ぶという取り組みも行われてきた。福井大学教職大学院を中心に、修士課程で学ぶ他校の教員や、他の拠点校との交流を通じて、実践の吟味や省察が行われている。

その他、板橋区教育委員会主導のもと、近隣の小学校三校と「賢くなります学びのエリア」という地域グループを作って、小中連携も進められている。

## 3. 教科センター方式の導入

赤二中の持つ特色の一つに「教科センター方式（平成25年度～）」がある。教科センター方式とは、生徒がいる「ホームルーム」に、授業ごとに先生がやってくるのではなく、生徒が教科の教室に移動して授業を受ける校舎の形式で、自分の意思で学習に向かう力を養うことなどを主な目的としている。

赤二中は、かつては、生徒指導が最優先されるような状況であったが、当時の先生方の懸命の努力により、平成22年度ごろから、授業改善の取り組みが進められるようになった。そのころに、板橋区から、校舎を改築し「教科センター方式」にするよう、計画が持ち上がった。導入前の学校内では、「せっかくながら落ち着いたのに、環境を変えることで、また荒れてしまうのでは」という不安の声もあったという。しかし、導入5年目の現在は、生徒を対象に実施したアンケートでも「自分から勉強しに行くのでやる気が出る」など肯定的な反応が多く、生徒の「主体的な学び」が促進されていることが窺える。



▲赤塚第二中学校の校舎見取り図の一部



▲社会科 学びのひろば

赤二中の校舎には、各教科の「教科のエリア」が設けられており、その教科専用の授業教室（理科の場合は実験室）と「学びのひろば」がある。「学びのひろば」は、教科独自のフリースペースで、教科に関連した図書や資料、掲示物などがあり、生徒は常時自由に使うことができる。赤二中は、教科センター方式であるが、各階に学年ごとのホームルームを設置する形がとられ

ている。ホームルームは、授業教室の3分の2ほどの広さで、生徒用のロッカー、二人で一つの長机、生徒数分の丸椅子がある。生徒がホームルームに戻るのには、朝学習・給食・終学活時のみである。

## 4. ICT機器の活用

赤二中のもう一つの特色に、ICT機器環境の充実がある。教科の授業教室には、黒板+可動式電子黒板（ホワイトボード）+プロジェクターがあり、教職員の教務用パソコンとは別に、各教室専用の教師用パソコン1台と、実物投影機、オーディオ機器が設置されている。生徒が使えるタブレット（Windows）はもとも40台あり、それに加え、PC教室用のパソコンがタブレットとしても使える機種に変更されたため、同時に80台使える状態にある。

教師用パソコンの活用例としては、授業の内容をパワーポイントデータにまとめて投影し、パワーポイントデータを軸に、デジタル教科書の画像や動画（YouTube等も含む）を適宜示すなどがある。パワーポイントで授業の構成を組み立てつつ、生徒の反応次第で、画面カメラを活用したり、生徒のノートや資料集を見せたりもする。生徒用のタブレットの活用例としては、実技教科では、生徒同士で動作を撮影して、模範演技の動作と重ね合わせるなどがある。また、5教科の場合は、「ラボノート（協働交流学習用ソフト）」を使って、自分たちの意見の共有化を図ったり、よいと思うものに投票させたり、などが行われる。別班検討の結果を共有する小型ホワイトボードの代わりにして「スカイメニークラス」というソフトも使われている。また、グループごとにタブレットを使用し、発表・掲示用の「まとめ」データを作らせることもある。

## 5. 生徒の主体的な学びと複数教科の連携に向けて

赤二中では、毎年、生徒用のガイダンス資料として「Akate School Life」やユニ冊子を配付している。そ

れには、教科ごとに「なぜこの教科を学ぶのか」「学習の目標」「学習の評価（観点の説明）」「学習の進め方」「年間学習計画」が示されている。この資料は、生徒に見通しを持って主体的に学びに向かわせるためのツールではあるが、指導する教師にとっても、どの学年のどの時期に、他教科ではどんな学習をしているのかを把握することができる。複数教科に関連する学習内容の履修時期をそろえられなくても、例えば、国語のフジゼンの学習が5月にあることを踏まえ、国語で学習した手法を7月の社会の「主体的・対話的で深い学び」を目的とした授業で使わせるなど、関連付けはできる。また、理科や社会などの内容教科では、「気候の違いについては前に社会で学習したね」などと触れることもできる。

## 6. 「赤二型学力」の育成に向けて

赤二中の平成29年度の研究主題は、「生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫・改善」「赤二型学力」の育成に向けてである。この主題を軸に、「協働」「探究」「主体的な学び」をキーワードとして、赤二中の生徒が身に付けるべき学力「赤二型学力」とは何かを追究しながら、「授業改善」に向けた実践が行われている。「赤二型学力」について、「学びを活用する力」「他者と協働して課題を探究する力」「社会参画力」「主体性や社会性」「集団性」などのキーワードが、小グループでの検討の場に出てきており、教職員同士の協働で生み出される内容が、自然と次期学習指導要領で示されている育成すべき資質・能力に近いものになってきているとのこと。引き続き、「赤二型学力」の育成と、そして、それを生徒にしっかりと身に付けさせるための、赤塚第二中学校一丸となった取り組みは続く。

（取材協力 赤塚第二中学校研究主任 中野英水先生）

# 京都市立東山泉小中学校

「小中協働で『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指す」



▲8年生の授業の様子

京都市立東山泉小中学校（以下「東山泉小中」）は、「施設併用型5・4制小中一貫教育校」として平成26年度に開校し、今年度で4年目を迎えた。小中一貫教育のみならず、「コミュニケーション能力や論理的思考力の育成」「主体的・対話的で深い学び」の実現など、様々な観点から、授業改善に向けた研究を行っている。小学校の教員も含めた、異学年・異教科・異職層の教職員が、いかにして同じ目標に向けて協働していくかを中心に、東山泉小中の実践事例を紹介することで、小中連携やカリキュラム・マネジメントの実現に向けた取り組みのヒントとしたい。

## 1. 東山泉小中学校の概要と研究のあゆみ

概要	
所在地	西学舎（1年生から5年生） 京都市東山区大和大路通七条下る5丁目下池田町527
東学舎	（6年生から9年生） 京都市東山区泉涌寺山内町5
校長	今津敏一 先生
学級数	29
児童生徒数	730名（平成29年度）

平成26年度 施設併用型5・4制小中一貫教育校として開校  
平成26～29年度 京都市英語教育強化拠点校  
平成29年度 学習指導要領改訂に向けた実践研究校

## 2. 一貫教育校としての特色

東山泉小中は、平成26年度に、旧「橋小・旧月輪小・旧今熊野小」の3小学校と旧月輪中の計4校が合併してできた、小中一貫教育校である。旧一橋小の跡地を使って造られた「西学舎（ファーストステージ、以下「1st」）」と、旧月輪中を全面改修した「東学舎（セカンドステージ、以下「2nd」）」の二つの学舎を使う「施設併用型」として開校した。二つの学舎は、坂道を含み約750m離れ、西学舎には1年生から5年生、東学舎には6年生から9年生が通う5・4制をとっている。6年生は東学舎に通い、半数弱の授業を教科担任が指導し、中学校式の定期考査を実施するなど、中学校の学習スタイルに適応しやすいくみがかとられている。

また、児童会・生徒会活動を合同で行う、体育大会は9学年全体で行うなど、学校行事や活動を1st・

2ndで合同・連携して行うことで、児童生徒らに自らの将来像を具体的に描かせるとともに、リーダーシップを育てることにつなげている。

東山泉小中は、開校時より、京都市から「英語教育強化拠点校」の指定を受けており、中学校英語科教員免許を持つ教員が1年生から9年生までの9年間を貫く外国語（英語）教育カリキュラム作成に携わるなど、すべての学年で中学校英語科教員免許を持つ教員との協働により英語教育が進められている。

## 3. 9年間を通じたカリキュラムの策定

東山泉小中では、9年間の学びをつなぐため、学びの「ルール」「進め方」「学習形態」をまとめた「学びのスタンダード」と、東山泉版シラバス「学びのまちしるべ」を策定している。

特に、「学びのスタンダード」については、学びの型が標準化されることで、指導教員や学年・学舎が変わったために児童生徒に生じるであろう戸惑いを減らしたり、目指すべき資質・能力の育成に向けた授業の学習過程を練り上げたりするための方策として導入・徹底されている。

「学びのスタンダード」は、「学びのルール」「学びの進め方」「学びのかたち」の三つからなる。

学びのスタンダード		
学びのかたち	学びの進め方	学びのルール
自分の考えを構築する「ひとり学び」の時間を重視しながら、考えを深化させるための話し合い活動（「ふたり学び」「グループ学び」「全体学び」）を取り入れた学習形態。話し合い活動は、授業のねらいや発達段階に応じて、効果的な方法を検討して取り入れる。	①学習課題を設定する ②学習計画を立てる ③課題解決のために必要な情報を収集し選択する ④考えを構築し、記述する ⑤グループや全体で交流する ⑥学習を振り返る	あいさつや返事、「さん」づけで呼び合う、敬体で話すなど、共に学ぶ相手に丁寧に接するための規律。 「めあて」と「まとめ」「振り返り」が対応した授業のための授業進行のガイドライン。 ①学習課題を設定する ②学習計画を立てる ③課題解決のために必要な情報を収集し選択する ④考えを構築し、記述する ⑤グループや全体で交流する ⑥学習を振り返る

## 4. 東山泉小中の研究体制における工夫

小中協働での研究を、いかにしてスムーズに行うかは、東山泉小中の大きな課題の一つであった。開校以来3年間研究を進めたことで、研究の進め方一つとっても、小学校と中学校では根本的に違うなど、課題が具体的に見出だせるようになった。

一般的に、小学校の場合、学級担任制・全教科指導であるため、研究の深まりを考慮し、教科を絞って研究を進めることが多い。それに対し、中学校の

場合は、教科を絞ると、研究に参加しづらい教職員が出てしまったため、教科・領域を横断するテーマを設け、それにそって教科ごとに研究を進める学校が少なくない。東山泉小中の場合、最初の3年間は、小中ともに「論理的思考力」「コミュニケーション能力」を主題とし、1stは、国語・算数・外国語を中心に、2ndは全教科・領域で研究を進めた。小学校の教員には、国語・算数・外国語以外にも教科を割り振り、小中協働で教科ごとの合同研修会を行った。しかし、相互に気付きはあったものの、議論の深まりや授業改善には活かしきれなかった。性急に「教科」の系統性を小中連携の軸とすると、皮肉にも小中の違いが表面化することとなり、うまく協働できないことが見えてきた。

また、1stのほうでは、研究1・2年目は、学年内で担任を「国語」「算数」「外国語」の三つの部会に分けていた。年度末の反省では、国語部会に属する先生と算数部会に属する先生の間で、同じ学年でも学びに差が生じる可能性を危惧する声も聞かれた。そこで、3年目は、「1年生」「2年生」……の学年を研究の母体とし、まずは国語、次は算数、次は外国語のように、3教科を順に研究することにした。このように、1stでは、「学年」を研究の単位にすることが望ましいことがわかった。

また、1・2年目は、6年生の担任は1st・2nd双方の部会に属していたが、2年間で人事交流が進んだこともあり、3年目からは2ndの部会に属するものとし、6年生の担任の過重負担の軽減につなげた。

3年目の体制見直しにより、1st内での課題はある程度解決したが、小中協働についての課題は残っていた。そこで、4年目となる29年度は、どの学年・教科・領域でも共通の課題になりうる「学習過程」「評

価」「情報活用」の三つのテーマごとの部会を1st・2ndそれぞれで編成し、1st・2nd合同研修会などによって、各部会の考えを共有するようにした。教科・領域を問わない授業作りの視点をテーマに据えることで、小中の教職員が教科の専門性にとらわれずに研究を深めることができ、結果として、小中の協働性が高まることを企図している。

加えて、3年目までは、1st・2nd1名ずつの研究主任や両学舎の統括担当を中心にトップダウン式で研究を進めていたが、4年目からは、1st・2ndそれぞれ三つの部会のリーダー計6名が主体的に研究を進めるポトムアップ式に変えることで、研究体制の活性化や協働性の向上につなげようとしている。

また、1stのほうの研究グループを編成するうえで、「1年生」は「学習過程」部会、「2年生」は「評価」部会のように、学年ごとに部会を割り振り、研究対象とする教科・領域は、学年ごとに自由に決めるようにした。自由に研究対象を決める形にしたことで、これまで研究対象でなかった教科・領域でも小中の連携・協働が深まった。

9年間のタテの系統性と、教科間の横のつながりをどう深めていくかは継続的な課題である。その課題に向き合いながら、東山泉小中では、根気よく人の交流を続け、小と中、学年、教科・領域の垣根を越えた協働の文化を醸成させている。

引き続き、「学習過程」「評価」「情報活用」の三つの視点から、9年間を見通す「学びのスタンダード」を活かしながら、「主体的・対話的で深い学び」とはどのような「学び」なのかを研究主題に据え、子どもたちに必要な「資質・能力」の育成に向けた取り組みが進められている。

（取材協力 東山泉小中学校 研究主任

藤本 裕之 先生）

# 国語



## 改訂の主なポイント

### 目標及び内容の構成

・教科・学年の目標が、資質・能力の三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に沿って示された。  
 ・これまで、各学年の内容は三領域一事項で構成されていたが、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の二項目に構成し直された。

### 各内容の構成

【思考力、判断力、表現力等】	【知識及び技能】
<p><b>A</b> 話すこと・聞くこと                      話題の設定、情報の収集、内容の検討/構成の検討/考えの形成(話すこと)/表現共有(話すこと)/構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞くこと)/話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)書くこと</p> <p><b>B</b> 題材の設定、情報の収集、内容の検討/構成の検討/考えの形成、記述/推敲/共有                      構造と内容の把握/精査・解釈/考えの形成、共有</p> <p><b>C</b> 読むこと</p>	<p>(1)言葉の特徴や使い方に関する事項                      言葉の働き/話し言葉と書き言葉/漢字/語彙/文や文章/言葉遣い/表現技法</p> <p>(2)情報の扱い方に関する事項                      情報と情報との関係/情報の整理</p> <p>(3)我が国の言語文化に関する事項                      伝統的な言語文化/言葉の由来や変化/書写/読書</p>

### 内容

#### 【知識及び技能】

- 語彙指導の改善・充実  
意味を理解している語句を増やすだけでなく、語や文章の中で使いこなせる語句を増やし、語彙の質を高めることが求められる。
- 情報の扱い方に関する事項の新設  
この事項では、話や文章等から情報を取り出して整理したり、関係をとらえたりすることを扱うため、従来の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」で示されていた内容も含まれている。
- 読書の意義に関する事項が新設
- **【思考力、判断力、表現力等】**
- 学習の過程の明確化  
上記の表のように「学習の過程」が明確化され、それぞれに指導事項が示された。また、全領域において、「考えの形成」が位置づけられた。
- 根拠・相手意識の重視  
全領域において、根拠を明確にしたり、根拠をもとに考えたりすることが求められている。また、「聞き手の立場」「読み手の立場」など相手を意識することや、多様な考え方を受け入れたり、合意形成を目指したりといったことも重視されている。
- 言語活動例  
実用的な活動が例示に加わった。(電子メールを書く、引用して説明したり解説したりする等)
- 他教科との関連  
漢字の習得や読書の指導など、他教科等と積極的に関連させて指導することが求められている。



# 社会

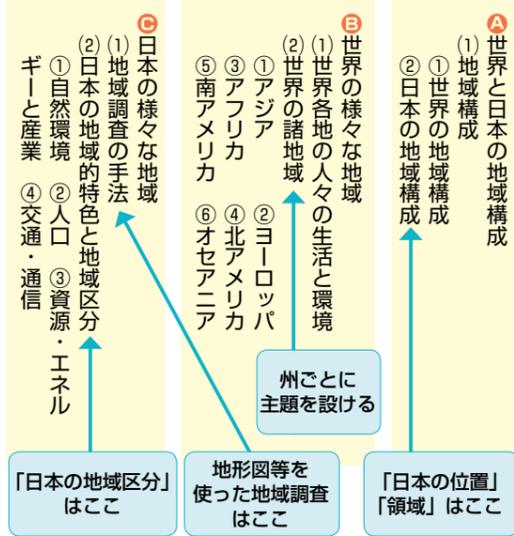


## 改訂のポイントと学習内容の主な改善点

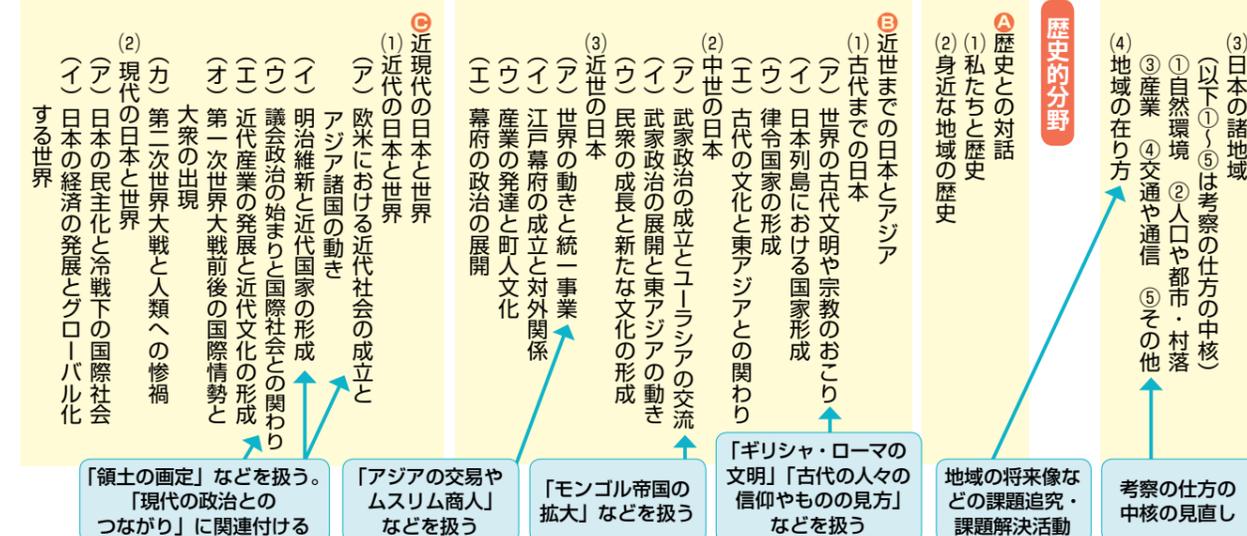
### 中学校社会科全体

・教科・各分野の目標が、資質・能力の三つの柱に即した構成に。内容は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の二項目に構成し直された。  
 ・歴史が5時間増の135時間に、地理が5時間減の115時間に。  
 ・防災教育や国土教育などの充実。

### 地理的分野



### 歴史的分野

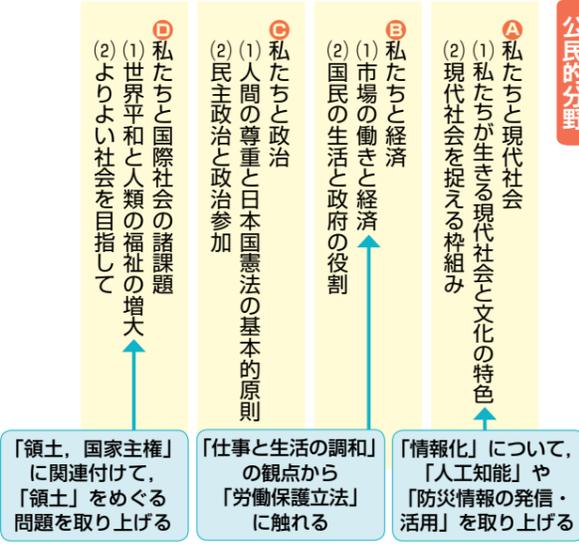


## 中学校国語科の移行措置

1. 都道府県名で使用する漢字のうち中学校配当20字分が、平成32年度から小学校配当として学習することになるのに伴い、中学国語では平成31年度・32年度で追加指導が必要になる。
2. 「共通語と方言」の内容が、平成33年度から第1学年に移行するのに伴い、平成32年度の第1学年については、指導が必要になる。

年度	第1学年	第2学年
平成31年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>未習になる都道府県名漢字(現行版3年の教科書で扱われているもの)を追加で指導</li> </ul>	
平成32年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>未習になる都道府県名漢字(現行版2・3年の教科書で扱われているもの)を追加で指導</li> <li>「共通語と方言」を指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>未習になる都道府県名漢字(現行版3年の教科書で扱われているもの)のうち、1年次に追加指導しなかったものを追加で指導</li> </ul>

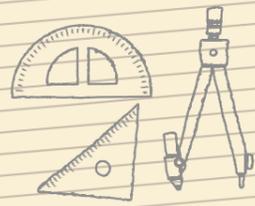
### 公民的分野



## 中学校社会科の移行措置

- 平成30年度～32年度 全学年・全分野**  
 ● 地理・歴史・公民の「領土・領域」に関する単元においては、新学習指導要領に沿って学習する。
- 平成31年度 第1学年**  
 ● 地理で5時間減・歴史で5時間増。
- 平成32年度 第1学年・第2学年**  
 ● 地理的分野の「世界の諸地域」の学習時に、「世界の様々な地域の調査」の学習で求められている、「適切な主題を設けた追究」等の学習を加味し、「世界の様々な地域の調査」の単元を省略する。
- 歴史的分野のうち、古代の「世界の古代文明」、中世の「ユーラシアの変化」、近世の「ヨーロッパ人來航の背景」、近代の「市民革命」の単元においては、新学習指導要領に沿って学習する。

# 数学



## 改訂のポイント

・教科・各学年の目標が、資質・能力の三つの柱に即した構成に。内容は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の二項目に構成し直された。  
・統計的な内容の充実。

## 学習内容の主な改善点

- ①数と式  
現行は第3学年の「自然数を素数の積として表すこと」が第1学年に移動。
- ②図形  
第2学年の「用語」に「反例」が追加。
- ③関数  
追加・学年移動の内容はなし。
- ④データの活用（現・資料の活用）  
第1学年で「累積度数」、第2学年で「四分位範囲」「箱ひげ図」が追加。「不確定な事象の起こりやすさ」（統計的な確率）が第2学年から第1学年に移動。「誤差」「近似値」などが第1学年から第3学年に移動。

# 理科



## 改訂のポイント

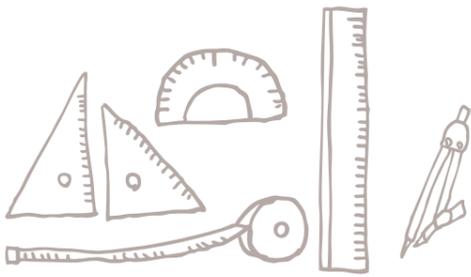
・教科・各分野の目標が、資質・能力の三つの柱に即した構成に。また、内容は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の二項目に構成し直された。

## 学習内容の主な改善点

- ①第一分野  
エネルギー（物理）領域では、「力」の内容が再編成される。第1学年で「力のつり合い」を、第3学年で「水圧・浮力」を学習する（「圧力・大気圧」は第2学年地学へ）。放射線の性質と利用の一部を「真空放電」と関連付けて第2学年で学習する。  
粒子（化学）領域では、「プラスチックの性質」を第3学年で学習する。
- ②第二分野  
生命（生物）領域が全学年を通して再編成される。第1学年で「分類の仕方」と「生物の体の共通点と相違点」を、第2学年で「植物と動物の体のつくりと働き」を学習する。「進化」については、第3学年で「遺伝の規則性と遺伝子」の後で学習する。  
地球（地学）領域では、「自然の恵みと災害」を各学年の該当単元で学習する。「圧力・大気圧」を第2学年の「気象要素」で学習する。

	第1学年	第2学年	第3学年
数と式	△素数（小5から） △自然数を素数の積として表すこと（3年から）		△自然数を素数の積として表すこと（1年へ）
図形		●反例	
関数			
データの活用	●累積度数 △不確定な事象の起こりやすさ（統計的な確率）（2年から） △平均値、最頻値、中央値、階級（小6へ） △誤差や近似値、 $a \times 10^n$ の形の表現（3年へ）	●四分位範囲、箱ひげ図 △不確定な事象の起こりやすさ（統計的な確率）（1年へ）	△誤差や近似値、 $a \times 10^n$ の形の表現（1年から）

内容の付加→● 学年間での移動→△ 各セルの上段：他学年からの移動または新設内容。  
各セルの下段：他学年への移動内容。



## 中学校数学科の移行措置

平成31年度

※第1学年において移行措置を行う。  
（第1学年の指導内容）

「数と式」に「自然数を素数の積として表すこと」、  
「資料の活用」に「累積度数」を追加し、「誤差や近似値」「 $a \times 10^n$ の形の表現」を削除。

平成32年度

※第1学年及び第2学年において移行措置を行う。  
（第1学年の指導内容）

平成31年度の内容に加えて、「資料の活用」に「不確定な事象の起こりやすさ（統計的な確率）」を追加。

（第2学年の指導内容）

「資料の活用」に「四分位範囲」「箱ひげ図」を追加。

	第1学年	第2学年	第3学年
第一分野	エネルギー △「力のつり合い（3年から。「力の働き」で学習。）」 △「圧力・大気圧（2年へ）」 △「水圧・浮力（3年へ）」	△「電熱線の発熱（小6から。「電気とそのエネルギー」で包括して学習。）」 △「放射線の性質と利用（3年から。一部を「真空放電」と関連付けて学習。）」	△「水圧・浮力（1年から。「水中の物体に働く力」で学習。）」 △「力のつり合い（1年へ）」 △「放射線の性質と利用（一部、2年へ）」
	粒子 △「プラスチックの性質（3年へ）」		
	3年総合		△「プラスチックの性質（1年から。「様々な物質とその利用」で学習。）」
	生命 ●「生物の特徴と分類の仕方」を新設。 △「動物の仲間（2年から。「植物の体の共通点と相違点」の後の「動物の体の共通点と相違点」で学習。）」 ※1年で、「分類の仕方」と「生物の体の共通点と相違点」を学習。	△「葉・茎・根のつくりと働き（1年から。「生物と細胞」の後で学習。）」 ※2年で、「植物と動物の体のつくりと働き」を学習。	△「進化（2年から。「遺伝の規則性と遺伝子」の後の「生物の種類の多様性と進化」で学習。）」
第二分野	△「葉・茎・根のつくりと働き（2年へ）」	△「動物の仲間（1年へ）」 △「進化（3年へ）」	
	地球 △「地球規模のプレートの動き（3年から。「地震の伝わり方と地球内部の働き」で学習。）」 △「自然の恵みと火山・地震災害（3年から）」	△「圧力・大気圧（1年から。「気象要素」で学習。）」 △「自然の恵みと気象災害（3年から）」	
	3年総合		△「自然の恵みと災害（各学年へ）」

内容の付加→● 学年間での移動→△ 各セルの上段：他学年からの移動または新設内容。  
各セルの下段：他学年への移動内容。

## 中学校理科の移行措置

平成31年度

※第1学年において移行措置を行う。  
（第1学年の指導内容）

「力のつり合い」「自然の恵みと火山・地震災害」を追加。「水圧・浮力」を削除。

平成32年度

※第1学年及び第2学年において移行措置を行う。  
（第1学年の指導内容）

平成31年度の内容に加え、「動物の仲間」を追加し、「葉・茎・根のつくりと働き」「圧力・大気圧」を削除。

（第2学年の指導内容）

「放射線の性質と利用」「自然の恵みと気象災害」を追加し、「進化」を削除。

連載企画

# 教材活用講座

第2回

## ワークブックと単元プリントで基礎学力の確認と定着を

この連載では、全国各地の中学校でお聞きした、補助教材を活用しながら、生徒のみなさんの学力向上に向けて工夫されている取り組みをご紹介します。

第2回目となる今回は、ワークブック・単元プリント（白プリント）といった、授業中の問題演習や予習・復習の課題、形成的な評価のために使用されている教材について、全国の先生方にお話をうかがいました。それぞれの教材に対する使用目的や、先生方独自で工夫されている効果的な使用方法をご紹介します。

実践1 ワークブックで学びの土台作り

実践2 単元プリントで形成的評価



# 外国語



### 平成32年度から変わる外国語教育

・平成32年度から、小学校中学年では「外国語活動」が新たに始まり、授業時数が週1コマに（年間35単位時間）。小学校高学年では「教科」になり、授業時数が週1コマ増加し、週2コマに（年間70単位時間）。

※平成30、31年度の移行措置期間では、中学年は最低15単位時間、外国語活動を実施。高学年は最低50単位時間、外国語活動・外国語科の内容を扱うこととなる。

・平成33年度から、中学校では授業は英語で行われることが明記され、対話的な活動や、実際に活用する言語活動がより重視されるよう。

・大学入試では、外部検定試験を活用し、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能が評価される。

### 中学校「外国語」改訂の主なポイント

#### 目標及び内容の構成

・教科の目標が、資質・能力の三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に沿って示された。英語の目標は「話すこと」「読むこと」「書くこと」の領域に分けられ、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の5領域となった。また、「外国語を使って何が出来るようになるか」を明確化する形に変更された。

・内容は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の二項目に構成し直された。

#### 内容

##### 【知識及び技能】

●語、連語及び慣用表現

●小学校の4年間で600〜700語程度の語を扱うこととされ、中学校ではこれに加えて1600〜1800語程度を新たに扱うとされた。

##### ●文、文構造及び文法事項

●表現をより適切でより豊かにするなどの目的で、「感嘆文のうち基本的なもの」「現在完了進行形」「仮定法のうち基本的なもの」など数項目が追加された。

##### ●思考力、判断力、表現力等

●言語活動及び言語の働きに関する事項

●日常的な話題・社会的な話題に関するコミュニケーションにおいて、生徒が自分の考えや気持ちを表す表現をより豊かにするため、新たに左記の内容などが追加された。

・「話すこと」[やり取り]：「相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をした

りして、互いに会話を継続する活動。

・「書くこと」：「簡単な手紙や電子メールの形で自分の近況などを伝える活動。

##### 指導計画の作成と内容の取扱い

・中学校では、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、「授業は英語で行うことを基本とする」と明文化された。

・小学校で扱った語彙や表現などを繰り返し指導し定着を図ることが明記された。

# 保健体育



### 改訂の主なポイント

1. 体育分野：「体育理論」の第1学年に「運動やスポーツの楽しみ方」を追加、「学び方」は第2学年に。
2. 保健分野：取り扱う学年が大きく変更になる。「健康な生活と疾病の予防」を各学年に分けて履修する。また、「健康と環境」を第3学年に移動する。

### 中学校保健体育科の移行措置

右記の改訂に伴い、次の表のように指導されている。

年度	第1学年	第2学年
平成31年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育理論に「楽しみ方」を追加</li> <li>・保健分野現行3年の「主体と環境」「調和のとれた生活」を追加</li> </ul>	
平成32年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育理論に「楽しみ方」を追加、「学び方」は省略。</li> <li>※「学び方」は33年度の2年次に履修。</li> <li>・保健分野現行3年の「主体と環境」「調和のとれた生活」を追加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健分野は「健康と環境」を省略、「傷害の防止」「生活習慣病」「喫煙、飲酒、薬物乱用」の内容で指導。</li> </ul>

# ① 国語

ワークブックで  
学びの土台作り



新しい学習指導要領の中学国語科では、育成を目指すべき資質・能力が「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定されました。国語で正確に理解し、適切に表現するには、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域における「思考力、判断力、表現力等」とともに、言葉の特徴や使い方、情報の扱い方、我が国の言語文化に関する「知識及び技能」も必要です。

ワークブックでは、本誌で主に「読むこと」「書くこと」「付属の聞き取り問題」(CD)で「話すこと・聞くこと」における「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を養うことができます。今後、授業で「主体的・対話的で深い学び」を取り入れるにあたって、基礎・基本を定着させるツールとして、ワークブックの活用が重要になってくると思われまます。

## 使用実態調査・活用事例紹介 対象教材



▲新学社「新・基礎の学習」

- 内容
- 本誌
  - 解説・解答集
  - 別冊「ステップアップ式古典」
  - 教師用 DVD-ROM/CD
  - 聞き取り問題
  - 有料オプション教材…ドリル

# ② 社会

ワークブックで  
学びの土台作り



新しい中学校社会科の学習指導要領では、「基本的・基本的な『知識及び技能』の確実な習得」、「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力、判断力、表現力等」の育成が「資質・能力の三つの柱のうちの一つ」として示されています。

「知識及び技能」の確実な習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成は、ワークブックという教材の主な使用目的とも重なります。新学習指導要領の実施も見すえながら、工夫してワークブックを活用されている先生方の思いやその活用方法について、紹介させていただきます。

## 使用実態調査・活用事例紹介 対象教材



▲新学社「社会の自主学習」

- 内容
- 本誌
  - 解説・解答集
  - 教師用 DVD-ROM (CD-ROM)※
  - 有料オプション教材・付属ノート
  - ミニプリント※
- (※は育鵬社版除く)

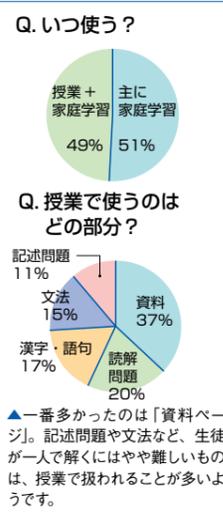
## 使用実態・活用事例

### ① 生徒の学力向上のために

ワークブックの使用場面は、「家庭学習中心」「授業＋家庭学習」がほぼ半々です。ただし、「家庭学習中心」の先生でも、「資料」や「文法問題」は授業でのみ使用の場合でも、ワークと同一・類似の問題を定期テストで出題するなど、指導と評価の一端にワークを取り入れていらっしゃる方がいます。

#### (1) 授業での使用

授業の導入で「漢字・語句」のコーナーをさせている。(宮城)  
生徒の興味を引くために、授業の導入で資料ページを使う。特に戦争の単元は必ず見せる。(北海道)  
読解の主要な問題を授業中に解かせ、内容の理解度を確かめている。(愛知)  
基本的には家庭学習だが、まとめとなるような記述問題は授業で扱う。授業中に何問か扱って埋めておくことで、家庭学習時の抵抗感が減らせる。(新潟)  
記述問題は書けない生徒もいるので、授業中に書き方や考え方を教え、家では書くだけの状態にしている。(福井)  
文法については授業の中で取り上げ、答えまで確認する。(茨城)



## 使用実態・活用事例

### ① 生徒の学力向上のために

予習または授業中に、教科書を見てワークを解かせる。ワークの解答語句は、教科書に線を引いて強調するよう指示。そうすれば、教科書がマイ参考書になると伝えている。(北海道)  
付属ノートにワークの基本問題(年表で確認)などを予習で解かせ、他の問題は授業後の復習として宿題に出す。「資料から考えよう」の一部を授業の最後に解かせること。(福島)  
教科書見開き1単元ごとに、授業の最後が宿題でワークを1大問解かせる。次の授業の最初に答え合わせをする。(北海道)  
今年度から「主体的・対話的で深い学び」の授業実践を始めた。ワークはその前段階の知識・技能のおさえとして活用している。1単元ごとに宿題にし、都度回収している。(北海道)  
授業ごとにノートにやらせて、定期テスト前に本誌にやらせて、それぞれ点検・回収。(福島)  
ワークは単元ごとに宿題で出して、回収・点検は定期テストごとにしている。(広島)  
週末課題にして、1〜2週間に一度、回収・点検を行っている。(宮城)  
ワークは授業ごとの宿題にして、単元ごとにバラプリントを宿題にしている。(福井)  
ワークは授業ごとに宿題にして、バラプリントはテスト前勉強として解かせる。(福岡)



#### (2) 授業ごと・単元ごとの使用

ワークは定期テスト前の復習用に使っている。(埼玉)  
定期テスト前に、ワークでテスト範囲を指定して取り組ませる。(三重・福岡)  
定期テストに「資料から考えよう」の文章記述問題を出題している。授業の前にワークを確認しておき、授業で「資料から考えよう」で出題されている内容に触れておく。(北海道)  
時差のところは、ワークの問題を使って授業を行っている。(三重・福岡)  
基本問題は授業後の宿題にし、「資料から考えよう」は授業中に説明しながら使う。(宮城)  
巻末の用語チェックは、単元ごと・テスト前と、生徒が何度もフル活用している。(三重)  
定期テスト前の使用  
ワークは定期テスト前の復習用に使っている。(埼玉)  
定期テスト前に、ワークでテスト範囲を指定して取り組ませる。(三重・福岡)  
定期テストに「資料から考えよう」の文章記述問題を出題している。授業の前にワークを確認しておき、授業で「資料から考えよう」で出題されている内容に触れておく。(北海道)

### (2) 家庭学習での使用

最初の読み取り部分を予習で解かせて、残りの読解問題は授業後の家庭学習にしている。(福岡)  
ワーク専用のノートを作らせて、1回目はそのノートにさせている。最低2回はくり返して解くように指導している。(新潟)  
わからなかった問題は色ペンで写して、後で復習するよう指導。そうすると、点検時に生徒がどこを丸写したか把握できる。また、オレシジのペンを使うと、赤シートで隠せてよい。(広島)

#### (3) 定期テストと連動した使用

定期テストには、ワークから漢字は20問、読解問題も3問程度を出題する。読解問題は、授業でやったことに合う問題を選んで出題する。(三重)  
テストにはワークの記号問題を記述問題に変えるなどして類題を出題している。(愛知)

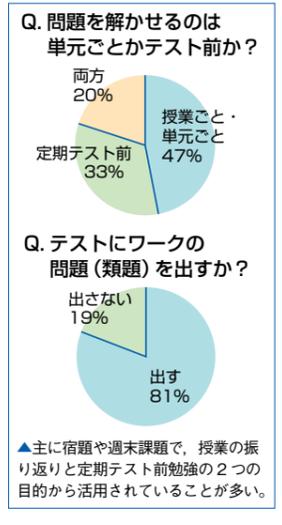
### ② 時間の削減・効率化のために

ワークをテスト前に提出させているが、巻末の、検印欄付きとびだすしおりがとても便利。(埼玉)  
★「新・基礎の学習」は巻末に検印欄付きのしおりがついているので、学習したページにしおりをはさんで提出させることができます。

★「新・基礎の学習」は巻末に検印欄付きのしおりがついているので、学習したページにしおりをはさんで提出させることができます。

★「新・基礎の学習」は巻末に検印欄付きのしおりがついているので、学習したページにしおりをはさんで提出させることができます。

### ② 時間の削減・効率化のために



定期テストでワークの類題を出している。図版が加工できるようになったことで、テスト問題の作成が格段にやりやすくなった。時差の図版データは授業中に拡大表示して授業でも使っている。(東京)  
定期テストではワークの同一問題は出さず、類似問題にしているため、図版加工機能は助かる。(東京)  
★「社会の自主学習」の本誌掲載図版は、全点モノクロにした上で、文字打ち換え等の加工可能な形式に、DVD-ROM (CD-ROM) に収録しています。



新しい中学校数学科の学習指導要領では、改訂のための基本的な柱が、「基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得」「知識及び技能を活用して問題を解決するために必要な数学的な「思考力、判断力、表現力等」の育成」「数学のよさを実感して粘り強く考え、生活や学習に生かしたり、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度の育成」の3つに集約されました。

「知識及び技能」の確実な習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成は、ワークブックという教材の主な使用目的とも重なります。活用されている先生方の思いやその活用方法について、紹介させていただきます。

使用実態調査・活用事例紹介 対象教材



▲新学社「数学の問題ノート」

内容

- 本誌
- 解説・解答集
- 教師用 DVD-ROM
- 有料オプション教材  
・ドリルほか  
(啓林・東書のみ)



新しい中学校理科の学習指導要領や、移行措置期間での学習内容の大幅再編に対し、1冊の本の形で提供されるワークブックは、学年内容を通しての把握に最適な教材です。

また、新しい指導要領の中学校理科の基本的な柱となる「基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得」「理知的な見方・考え方」を働かせた「思考力、判断力、表現力等」の育成」は、ワークブックという教材の主な使用目的とも重なります。活用されている先生方の思いやその活用方法について、紹介させていただきます。

使用実態調査・活用事例紹介 対象教材



▲新学社「理科の自主学习」

内容

- 本誌
- 解説・解答集
- 別冊「作図計算トレーニング」
- 教師用 CD-ROM
- 有料オプション教材  
・付属ノートほか

使用実態・活用事例

①生徒の学力向上のために

(1) 主な使用の流れ

授業

家庭学習

【導入】  
ウォームアップや前時の復習として、基本問題に3～5分取り組ませる。

【宿題】  
授業の進度に合わせて取り組ませる。(授業ごとに宿題にする)  
提出期日を設けて課題にする。

【問題練習】  
教科書の練習問題では足りないとき、問題を指示して取り組ませる。  
発展問題に全員で取り組み、解説。

【テスト前の復習】  
定期テスト範囲に合わせて取り組ませる。  
一度宿題で取り組ませた問題に再度取り組ませる。

(2) 使用事例

- ・授業中に教科書の練習問題をやらせて、早くできた生徒や時間が余ったときにワークをさせる。(北海道)
- ・生徒が一人で取り組むのが少し難しい問題や、定期テストによく出題する問題を授業で取り上げ、解説する。(三重)
- ・基本的には家庭学習用だが、テスト前には授業内で30分程度ワークに取り組ませることもある。普段はノートに学習し、テスト前にワークに書き込むよう指導している。(新潟)

・授業で使うページ数の少ないワーク(計算中心)と、宿題にする標準的な分量のワークの2冊を使用している。(群馬)

(3) 回収・点検

- ・毎回の授業後に宿題で取り組ませ、次の授業の最初に机の上に置かせて、点検印を押す。(福島)
- ・授業の最後に演習として毎時間ワークを使用。できなかつた問題は宿題にし、次の時間の授業中にチェックする。(広島)
- ・答え合わせしたものを毎週点検し、提出物の評価に組み込んでいる。(岡山)
- ・定期テスト前や夏休み明けに回収して点検する。間違った問題の書き直しをしているかなどを評価する。(広島)

(4) 指導の工夫

- ・丸付けをしていて間違えた問題があった場合、計算問題については解答を丸写しするのではなく、消して書き直しをするよう指導。(福井)
- ・別のノートにやってきたり、オレンジペンで書き込んで赤シートで隠せるようにしたり、解けない問題を大きく囲んだり、生徒自身で工夫して取り組ませている。(埼玉)
- ・解答解説を最初から全部渡しており、分からない問題は解き方を見ながら取り組んでよいとしているが、解説を見ながら書いたところは赤字で書くように指導している。(群馬)

②時間の削減・効率化のために

- ・定期テストにワークの類題を2割程度出題する。教師用DVDの図版データを定期テスト作成時に活用している。(三重)
- ・図形などの問題で、問題の図を投影して生徒に見せ、説明しながら取り組ませている。(北海道)

★「数学の問題ノート」の本誌掲載図版は、全点DVD-ROMに収録しています。

使用実態・活用事例

①生徒の学力向上のために

(1) 主な使用の流れ

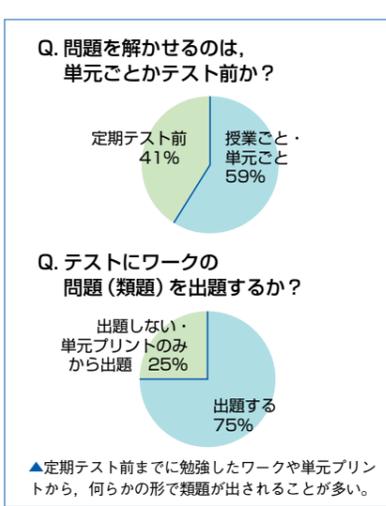
- ・家庭学習での使用が主ですが、授業の最後やすきま時間に復習としても使用されています。
- ・宿題は中単元ごと・小単元ごとに実施されることが多く、その回収・点検は定期テスト前後にまとめるタイミングが多くなっています。

(2) ワーク本誌以外の併用

付属ノートの使用率が他教科と比べて高く、こまめな回収・点検や、本誌に直接書き込むこととあわせてのくりかえし学習に活用されています。単元プリントとの併用率も他教科と比べて高く、一方を単元ごとの課題、他方を定期テスト前の課題のように、組み合わせ活用されています。

(3) ワーク活用事例の詳細

- ・授業の最後5～10分程度で復習。残りは課題。単元プリントをテスト前の課題として実施。(福井)
- ・授業の初め5～10分で確認。初めにノートにさせ、後で本誌にさせる。(愛知)
- ・毎日の宿題として利用。点検は定期テストごとときちんと自分で解いているか、答え合わせはできているか、を見る。(広島)
- ・家庭学習中心の使用だが、授業中にやや難しい問題や重要な問題に取り組むこともある。回収・点検は付属ノートを活用し、学期に4～5回実施。(三重)
- ・ワークは定期テスト前の復習用。(埼玉)
- ・要点のまとめ問題は、理科が苦手な生徒に「これだけは覚えて」とテスト前に取り組ませている。(京都)
- ・宿題で、解答は配っているが、出来が悪いところは解説している。特に1分野。(京都)



▲定期テスト前までに勉強したワークや単元プリントから、何らかの形で類題が出されることが多い。

・別冊「作図計算トレーニング」は、学校で保管し、使った際に配付する。使用場面は自学自習の時間。別冊であるため使い勝手がよい。(三重)
- ・別冊「作図計算トレーニング」は、夏休み課題の一つとしても丁度よかった。(広島)

★「理科の自主学习」では、作図計算特集を別冊で提供。別冊にすることで、作図の描きやすさや、教材使用場面の選択性を高めています。

②時間の削減・効率化のために

- ・定期テストにはワークの図を使う程度で、同じ問題は出題しない。(福島)
- ・ワークから2～3割、同じ問題や改題を定期テストに出題。(新潟)
- ・テストでは、ワークの同一問題をサービスタイトとして出題。他が自作の難しい問題なので。(広島)
- ・パワーポイントを使って授業をしているので、CDの図のデータをその素材として活用している。(岡山)

★「理科の自主学习」の本誌掲載図版は、全点モノクロ・文字打ち換え等の加工可能な形式にし、CD-ROMに収録しています。

## ⑤ 英語



グローバル化が急速に進展する中、国際共通語である英語力の向上に向けて、英語教育は大きな改革が進んでいます。小学校では、外国語活動が3年から実施され、5、6年が教科としての学習となりま。また中学校では、英語で授業を行ったり、学習語彙の大幅増、高校内容の一部前倒しなどが実施されます。「聞く」「読む」「話す」「やり取り」「話す」「発表」「書く」の5領域をバランスよく指導することが求められていますが、英語力の基本となる文法や語彙、表現を確実に習得するために、教科書だけではなく、ワークを活用し、英語力の土台を強化することが今後ますます重要となります。

### 使用実態調査・活用事例紹介 対象教材



▲新学社「ジョイフルワーク」

#### 内容

- 本誌
- 解説・解答集
- 別冊「語順トレーニング」
- 教師用 CD-ROM
- 有料オプション教材
- リスニングテスト
- 付属ノート
- (東・開・三・学のみ) ほか

### 使用実態・活用事例

#### ① 生徒の学力向上のために

家庭学習での使用が主ですが、授業でも、冒頭の文法解説や、その後にある基本問題を扱うという先生も多いです。家庭学習のみの使用の場合でも、ワークと同一・類似の問題を定期テストで出題するなど、指導と評価の一環にワークを取り入れることができます。

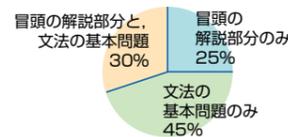
#### (1) 授業での使用

- ・新出文法導入時に、基本文の解説を確認。教科書よりも詳しくまとめられている。(三重)
- ・全員で取り組める基本問題を解かせる。(福岡)
- ・家庭学習では解きにくい自己表現問題に取り組みさせて、机間巡視で添削している。(北海道)
- ・授業の最後の5分間で取り組む。英文を声に出して読ませながら問題を解かせる。(広島)
- ・家庭学習としてワークの問題を解かせ、授業の最後に答え合わせの時間を取っている。(広島)
- ・授業の最後に10分程度の時間で基本問題を解かせ、マルつけまでさせる。ページ数も多いので、授業でもワークの時間を取るようにしている。(三重)

#### Q. いつ使う？



#### Q. 授業で使うのはどの部分？



▲授業でワークを使う場合は、ほとんどの先生が、冒頭の解説や基本問題など文法の導入時に使用。

#### (2) 家庭学習での使用

- ・単元ごとに宿題で使用。テスト前に回収・点検している。(愛知)
- ・テスト前の宿題として使用。強制はしていないが、3回やるように指導。(1〜2回目はノートに、3回目はワーク本誌に書き込む)(新潟)

#### (3) 定期テストと連動した使用

- ・授業では使わず、テスト前に集中してさせる。定期テスト問題もワークから一部出す。語順トレーニングの問題はよく使う。(埼玉)
- ・定期テストにもワークからの問題を必ず出す。改題することもそのまま出すこともある。長文は選択問題を記述問題にするなど、多少ワークより難しくして出している。(千葉)
- ・B問題は宿題だが、テストではワークの「自己表現」と同じ問題を出す。(愛知)

#### ② 時間の削減・効率化のために

- ・CD-ROM収録の単語プリント作成ツールは重宝している。授業中・宿題の両方で使う。(宮城)
- ・まとめテストにある長文問題はよく定期テストの素材として使う。教科書と異なるが同テーマの文章で、初見の文章よりは見覚えがあるので、定期テストに出題するには最適。(北海道)
- ★「ジョイフルワーク」には単元末にまとめテスト、随所に長文問題特集、また教師用CD-ROMにワーク本誌とは異なる長文問題データ集があり、使える長文問題が豊富です。
- ・スピーチテスト実施の際の待ち時間に使用させる。課題を用意する手間が省ける。(京都)
- ・読み物特集がよい。授業で開かせて資料として使うこともある。(千葉)

### 単元プリントラインナップ(※新学社)

	タイプ1【単元の確認向け】	タイプ2【観点別評価向け】
書名	学習の達成	Wプリント
発刊教科	国語/社会/数学/理科/英語/音楽/保体 (教科書準拠版)	国語(新刊)/社会※/数学※/理科/英語 (※は標準版のみ)
判型	A4判	A4判
回数[枚数]	多い (国語=16~18回/地理=10~12回/歴史=8~14回/公民=16回/数学=16回/理科=20~24回/英語=16回/音楽=8回/保体=16回)	少ない (国語=12回/社会=10~12回/数学=10回/理科=12回/英語=8~12回)
特長	・教科書に合わせて、基本問題(オモテ面)~応用発展(ウラ面)まで単元内容をバランスよく出題。 ・カラーで取り組みやすい。 ・(基本的には5点・10点の)均一配点で採点しやすい。 ・手引きの解説が詳しく、補充問題も充実。	・指導と評価を一体化させる1単元2枚のプリント構成(評価プリント+確認プリント)。 ・全教科1大問1観点。観点別評価がしやすい。関心・意欲・態度の問題もあり。 ・手引きは生徒の自己採点がしやすく、自己評価もできる。

## 単元プリントで 形成的評価

単元プリント(白プリント)は、「1単元1枚。その都度配付できる」という扱いやすい形態のため、評価テストや単元終了時の確認、定期テスト前の復習、さらには急な自習時間用の教材としてなど、さまざまな用途で活用されています。

この単元プリントを年間の指導の中にうまく組み込み、生徒の学力向上に役立てている先生方も大勢いらっしゃいます。

指導計画作成時のご参考に、全国の先生方が実際に単元プリントをどのように活用されているか、使用事例をご紹介します。



### ワークとの違い

**ワーク**  
単元を細かく区切り、基本事項の定着を図る問題を中心に、作業問題や穴埋め問題など、テストに出にくい問題も含め、多くの問題に取り組みます。

**単元プリント**  
1単元の内容を1枚のテスト形式に凝縮しています。問題文も解答様式も、実際のテストにより近くなっています。

### ワークと単元プリントの併用事例

#### 併用事例1

使用するタイミングで使い分け  
ワークは授業ごとの復習として、授業の終わりに家庭学習で使用。

単元プリントは、1単元が終わった後や定期テスト前の課題として使用。

併用事例2  
冊子形式・プリント形式の特性で使い分け  
ワークは学校には持ってこさせずに、家庭学習で使用。  
単元プリントは都度配付しやすいので、授業中に使用。

併用事例3  
使用する目的で使い分け  
ワークは教科書内容の確認や授業の復習として使用。  
単元プリントは単元テストとして使用し、評価にも入れる。

単元プリントは、自習課題としても使っています。  
(新潟県・N先生)

# 単元プリント 活用術

## 「学習の達成」編

単元プリントの中でも、各社から発行されていて、多くの学校で採用されているのが、「カラー版」「年間12〜20枚程度」「オモテが基本問題、ウラが発展問題」というタイプです。(新学社では「学習の達成」を発行。)

単元プリントの主流であるこの教材について、全国の先生方にお聞きした、選りすぐりの活用術をご紹介します。

### 活用術1 実施時間

1枚(1回)の実施時間は20分〜30分程度です。1単位時間の授業で、問題をさせるだけなら2枚、答え合わせをして、間違えやすい問題の解説までするなら1枚配付して学習させるケースが多いようです。1枚だけ使う場合は、前後に別の学習をさせることもできます。

- 半分は授業中に使う。実施時間は15分。解けなかった問題は宿題にする。(福井県 社会・H先生)
- 定期テスト前のふり返りの時間に使う。テスト範囲を単元プリント3〜4枚分に合わせる。ふり返りの時間の1時間ごとに1枚配付する。プリント以外の学習もさせる。(青森県 理科・K先生)

英語は、別売のリスニングテストを最初の15分で実施し、あとの問題を30分で解かせます。



# 単元プリント 活用術

## 「Wプリント」編

新学社では、指導と評価の一体化を目指し、観点別評価のできる単元プリントとして、平成28年度から「Wプリント」という教材を発刊しています。A4判の「評価プリント」とB5判の「確認プリント」を組み合わせた教材です。「評価プリント」を単元テストとして実施する前後に、「確認プリント」を予習または復習として使用することを想定した教材ですが、実際は、先生方の授業スタイルに合わせてさまざまなパターンでお使いいただいています。ここでは岡山市でお聞きした使用事例をご紹介します。

**教材の内容**  
A4判両面8〜12回。1大問1観点で「知識・理解」から「関心・意欲・態度」まで全観点を網羅。標準実施時間30分。

**教師用CD** 「確認プリント」「評価プリント」  
B5判両面。「評価プリント」と同じ範囲で同じ回数、同一または類似問題で構成。1大問1観点で「関心・意欲・態度」以外の問題を出題。標準実施時間10分。



教師用資料や、観点別集計ソフト、補充プリント、図版データ等を取録。(社会のみDVD)

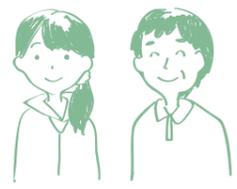
### 活用術2 答え合わせ

宿題にする場合は、次の授業で解説・解答を配って答え合わせする。問題をピックアップして補足説明をする。(福井県 社会・H先生)

● 答え合わせは生徒のグループ内で行い、得意な生徒が苦手な生徒に教えている。(三重県 理科・O先生)

● 答え合わせは、授業中にとり同士でさせる。(群馬県 理科・T先生)

● 答え合わせは、口頭で答えを言っ、一つ一つ確認しながら行います。そのあとで解説・解答を配付します。



### 活用術3 定期テストへの出題

● 勉強した生徒がある程度解けるように、また一度勉強したことが定着しているか確認するため、ワークと単元プリントの内容を少しずつ定期テストで出題します。全体の問題数の1〜2割程度。(石川県 社会・M先生)

● 問題形式を変えたり、ヒントの語句を取るなどして、難易度を上げて出題する。定期テストは2回目なので、少し難しくしたい。(福井県 社会・H先生)



### 使用事例1 「確認プリント」を予習に、「評価プリント」を単元テストとして実施。

単元名	教科書の範囲	ワークの範囲	単元テスト(「評価プリント」)の実施日の欄がある。
1	物質の分子	12~31	2~7 月 日
2	物質と分子の化学変化	32~58	8~18 月 日
3	化学変化と物質の質量	59~75	20~35 月 日
2. 動物の生活と生物の繁殖			
4	動物と環境	86~95	36~37 月 日
5	動物のからだのつくりと働き(1)	96~107	38~41 月 日
6	動物のからだのつくりと働き(2)	108~124	42~51 月 日
7	動物の体の仕組みと働き	125~141	52~65 月 日
3. 天気と空気の性質			
8	気象観測と天気予報	156~173	66~77 月 日
9	天気とものほけの天気予報	174~203	78~95 月 日
4. 電気の性質			
10	静電気と電流/電気の性質(1)	214~237	96~103 月 日
11	電気の性質(2)	238~247	104~117 月 日
12	電流と磁界	248~265	118~136 月 日

① あらかじめ、年間の学習予定を生徒に配付。  
② スケジュールにそって、単元テストに向け、ワークや「確認プリント」で各自勉強しておくように指導する。  
③ 「評価プリント」による単元テストを、授業中に30〜40分で実施。  
④ 先生が採点し、観点ごとの得点を集計表に入力してから返却する。  
⑤ 単元テストのタイミングで、ワークやファイル点検も行う。



### 活用術4 様々な活用場面

「単元終了時」「定期テスト前の復習時間」「急な自習時間」以外にも様々な場面で活用されています。1年間で使い切れない場合、残ったら次の学年の最初に取り組ませます。年度の最初は教科書に入らず、前学年の復習をすることになっているので便利です。



### 活用術5 回収・点検・評価

● 全部解答を埋めるまでは受け取らない。オモテ面は、関心をはかるものとして、ウラ面は「書く」観点の評価に活用している。(鹿児島県 国語・T先生)

● 回収・点検する。丸つけしているか、ファイリングしているか、間違った問題を訂正しているか、解説・解答の補充問題までしているかをチェックして、評価に加味している。(富山県 理科・Y先生)

● 回収・点検して評価に組み入れる。エクセル表で、観点別に点数を記録する。(福井県 国語・T先生)



### 活用術6 指導の工夫

● 授業で使用するときはオモテ面だけを生徒同士で相談しながら取り組ませ、交換して丸つけをさせる。(富山県 国語・N先生)



### 使用事例2 単元末に「評価プリント」を実施。定期テスト前に復習として「確認プリント」を宿題に。

① 単元の学習が終わったら「評価プリント」を授業中に実施する。  
② 先生が採点し、観点ごとの得点を集計表に入力してから返却する。  
③ 定期テスト前にテスト範囲の「確認プリント」を配付し、テスト勉強に活用。



### 使用事例3 単元末に「評価プリント」を宿題に、「確認プリント」を単元テストとして実施。

① 単元の学習が終わったら「評価プリント」を宿題として配付。  
② 次の授業で「確認プリント」を8〜10分程度で実施。  
③ 先生が採点し、観点ごとの得点を集計表に入力してから返却する。



**新刊** 国語  
**Wプリント**  
光村・標準  
観点別評価 ができるプリントです！  
観点別評価プリント **Wダブルプリント** 評価と確認  
全観点対応  
DVD-ROM付  
国語 1年

社会の **社会**  
**自主学习** **全面改訂**  
東書・帝国を全面改訂 (公民は東書のみ)  
※その他の準拠も継続発行  
社会の自主学习 地理 1

**全面改訂** 数学  
**数学の問題ノート**  
東書・啓林を全面改訂  
※その他の準拠も継続発行  
数学の問題ノート 1

# 平成 **30** 年度版 日常教材パワーアップ!

理科の **理科**  
**自主学习** **改訂新版**  
全準拠  
理科の自主学习 1

**新刊** 英語  
**ラウンドドリル**  
標準  
新刊 4技能で深める Round Drill 1  
1-0のラウンドで、同じテーマを、それぞれの技能でくり返し学習し、身につける！  
【テーマ】 将来の夢  
Round 1 聞く Round 2 読む Round 3 書く・話す Round 4 書く・話す  
阿野幸一 監修 新学社

歌集 **新刊** 音楽  
**Joyful Song**  
標準  
Joyful Songs ヨイフルソング

※表紙デザインは制作中のものですので、変更になる場合があります。

**次号  
予告**

**2018年9月頃 発行予定**

**Sing Vol.13**

**特集** 教育現場でICT活用／「主体的・対話的で深い学び」の実践  
**連載** 教材活用講座 ～実力テスト／資料集～

次号も、すぐに役立つ最新教育情報を満載してお届けします！

発行人／中川栄次 編集人／内藤祐宏

編集・デザイン／新学社編集部／株式会社 ひでみ企画 印刷／大平印刷株式会社

発行所／株式会社 新学社 TEL. 075-581-6111〈代表〉

京都 〒607-8501 京都市山科区東野中井ノ上町11-39 東京 〒162-0841 東京都新宿区払方町14-1

新学社 ホームページ → <http://www.sing.co.jp/>

◆本書の内容についての責任はいつい新学社にあります。お問い合わせは、当社編集部へお寄せください。  
◆本書の全部または一部を複製・転写して使用すると著作権法違反となり罰せられます。

学力向上・確かな教材  
**日協**  
(社)日本図書教材協会